

有難いから大切へ

鹿児島大学附属中学校 三年

脇田

颯州

「こら、ちゃんと水を止めなさい。」

朝の歯磨きの時に、僕は小学四年生の弟に注意をする。

「わかってるよ。」

と言ってすぐに出しっぱなしの水を止める。

本当にわかっているのか・・・と僕はいつも思う。

三年前の夏、僕は無人島でのキャンプに参加した。テレビ番組でみていた無人島生活は非日常であつたから、すべてが新鮮でとても楽しそうに思えた。そんな僕だから無人島生活への期待ばかりが大きく膨らみ、不安なんて何もなかつた。

ところが島へ着いてみると、何もない。灼熱の太陽が僕らを容赦なく照り付け、守ってくれる影さえなかつた。わかつていたけど本当になにもないのだ。テントを張ったり、穴を掘ってトイレを作ったり、汗だくになって

頑張った。ようやく日が暮れ始め、疲れ切った体を休めようと思ったが汗を流すシャワーもない。限られた飲み水は、みんなで話し合っ
て使うことになっていたから、簡単には飲めなかつた。普段当たり前だと思っ
ていたお風呂もシャワーも飲み水さえも、何もない生活を体験して初めていつもの生活が「当たり前」ではないことに気づいた。何も無いという体験は、不自由の中で学ぶ「日常の当たり前」の有難さ」だった。

世界中には砂漠化や干ばつで水不足が悪化して、飲み水ですら満足に手にはいら
ない生活をしている人たちがたくさんいることを頭の中ではよくわかっていた。赤ちゃんにミルクを作
って飲ませることができない母親や、家族のために片道2時間かけて毎日バケツ一杯の水をくみに歩く子どもたち。そうやって手に入れる水は、決して僕たちが口にするこ
とのないような大きな水たまりの茶色く濁った泥水だったり。そんな場面を衝撃的だと思

いながら、かわいそうだと思ふ僕は、何も理解していなかっただと初めて感じたのだ。水は人間が生きていく上に欠かすことのできないものだとしたら、どうしてこんなに水に対しての思いが違うのか、無人島での僕は初めて水の大切さ、有難さを感じる事ができたのだ。

それからの僕は、いつもの生活に戻ったときに水に対する思いが大きく変わった。すぐに手に取ることできるこの水は、あって当たり前前ではない。この水一滴一滴を大切に使用しなければいけない。無駄な水があってはならないのだ。

「水を大切に」という本当の意味を分かるためには、まず本当の「有難さ」を知るべきだと僕は思う。

これから続く地球の未来のために、僕たちは水の有難さをもっともっと知っていかなければいけないと僕は思う。